

国際文化学科 カリキュラムマップ(2026年度入学生)

次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。

①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術)
 ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識)
 ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考)
 ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲)
 ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度)
 ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国の内外で「他者への献身」ができる(行動)

科 目 名	授業形態	配当年度	単位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号						
						◎達成のために特に重要 ○達成のために重要						
						①	②	③	④	⑤	⑥	
やさしい日本語	講義	1	2	この授業では、一般的に使われている日本語を減災・防災時や観光などで外国人にとってわかりやすい「やさしい日本語」にするにはどうすればよいかという近年本格的に研究が進められている多文化共生社会に焦点をあてながら、その現状を学習する。	(1)一般的な日本語を「やさしい日本語」に置き換えることができる。 (2)多文化共生社会における「やさしい日本語」の重要性が説明できる。	◎	○					○
異文化理解入門ゼミナール1	演習	1	2	異文化を理解するために、文化人類学における文化相対主義という概念を学ぶ。この授業では、世界のさまざまな文化を取り上げ、文化の固有性と人類の普遍性について考える。	(1)文化相対主義という考え方を身につける。 (2)世界の文化の多様性について知る。 (3)人類の普遍性について知る。		○	○	◎			
異文化理解入門ゼミナール2	演習	1	2	異文化を理解するために、世界のさまざまな社会にみられる行事や慣習、価値観などについて学ぶ。この授業では、このような固有性が生まれた背景について考える。	(1)文化の固有性のあり方について知る。 (2)文化の固有性が生まれた背景について説明できるようになる。 (3)異文化を理解するうえで重要な視点を身につける。		○	○	◎			
多文化共生入門ゼミナール1	演習	1	2	コロナ禍で国境をまたぐ人の往来が停滞したとはいえ、日本に暮らす外国人の人は過去最多となっている。また、国籍は日本であっても、外国にルーツをもつ人、ハーフ(ダブル)の人、先住民や難民など、この日本には多様な人々が暮らしている。この授業では、そうした人々が置かれた状況を文献や映像をもとに紹介し、学校、職場、地域社会、行政、コミュニティのなかでどのような問題を抱えているのか、を取り上げる。天理大学で学んでいる留学生からも聞き取りを行いたい。	(1)統計データの読み方を理解し、今後の大学での学び(レポートや論文)に生かすことができる。 (2)日本における多文化共生の現状を、当事者の体験や声から理解することができる。 (3)違いを否定し、排除するのではなく、違いを受けとめ理解しようとする柔軟な思考を身につけることができる。		○	○	◎			
多文化共生入門ゼミナール2	演習	1	2	「多文化共生論1」で得てもらった知見を土台として、この授業では、日本以外の国や地域での多文化共生に関する諸問題や解決に向けた取り組みを、文献や映像を通して学ぶ。授業の後半では、受講生は多文化共生に関するテーマを自分で見つけて調べ、その成果をパワーポイント等を用いて発表してもらい、クラスの中で議論したい。	(1)日本以外の国・地域での多文化共生の現状、歴史、取組みについて説明することができる。 (2)多文化共生社会を構築していくために有効な方策を具体的に提案することができる。 (3)違いを否定し、排除するのではなく、違いを受けとめ理解しようとする柔軟な思考を身につけることができる。		○	○	◎			
国際事情入門ゼミナール1	演習	1	2	本入門ゼミナールでは、国際事情に関する情報収集について学ぶ。日々多くの多様な国際事情に関するニュースが流れている。その媒体は、伝統的な新聞やテレビそして昨今は手堅な情報源であるネットニュースやSNSなどである。世代によって、情報源とするものは異なっている。また、日本語以外の外国語の情報も無料の翻訳ソフトを使うことで簡単に手に入る。本授業では、情報源による情報の質や量の差異などについて考えていく。	(1)国際事情に関する情報収集方法について知る。 (2)様々な情報源からデータを収集する。 (3)情報の比較、分析を行い、国際事情に関するデータの信憑性を考える。		○	○	◎			
国際事情入門ゼミナール2	演習	1	2	本入門ゼミナールでは、国際事情入門ゼミナール1で学んだ見地をもとに、各自の関心のある国際事情に関するトピックの内容を複数の情報源から収集する。収集したデータを比較・分析することによって、多角的な見地から国際事情の情報を得ることを学ぶ。	(1)各自の関心のある国際事情のトピックを見つける。 (2)トピックに関する情報を複数の情報源から収集する。 (3)多角的な見地から国際事情について知る。		○	○	◎			
歴史文化入門ゼミナール1	演習	1	2	あらゆる文化は歴史的に形成されてきたものであり、歴史的由来を知ることなしに異文化も自文化も理解することはできない。現代に至るまで、世界中の人々が自分たちの生きる世界の成り立ちを説明するため、様々な世界史像を描いてきた。この授業では、世界の歴史が時代・地域によってどのように異なる捉え方をされていたかを学び、歴史を批判的に見ることができるようにする。	(1)時代と地域によって異なる世界史像が描かれてきたことを理解する。 (2)既存の歴史像を批判的に見る態度を身につける。		○	○	◎			
歴史文化入門ゼミナール2	演習	1	2	あらゆる文化は歴史的に形成されてきたものであり、歴史的由来を知ることなしに異文化も自文化も理解することはできない。一方で、歴史は容易にねじ曲げられ利用されるものでもある。この授業では、世界の歴史が様々な集団に属する人々によってどのように描かれ利用されてきたかを学び、歴史を批判的に見ることができるようにする。	(1)歴史が目的をもって描かれるものであることを理解する。 (2)既存の歴史像を批判的に見る態度を身につける。		○	○	◎			
異文化理解ゼミナール1	演習	2	2	異文化は異なる時代、異なる地域にだけ存在するわけではない。同じ時代の同じ地域においても異なる文化は存在する。異文化を理解するとはどういうことか、具体的な事例を通して考える。	(1)身近なところにも異文化が存在することを知る。 (2)具体的な事例を通して、異文化を理解する視点を身につける。		○	○	◎			
異文化理解ゼミナール2	演習	2	2	異文化を理解することは自文化を理解することに帰着する。自文化の理解は異文化理解を通して可能になる。自文化理解に通じる異文化理解について、具体的な事例を通して学ぶ。また、文化相対主義など、文化人類学における理論・主義について学ぶ。	(1)異文化を理解することで自文化を相対化できるようになる。 (2)文化相対主義について、その問題点も含めて理解する。		○	○	◎			

ディプロマ・ポリシー		<p>次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。</p> <p>①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術) ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識) ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考) ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲) ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度) ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国の内外で「他者への献身」ができる(行動)</p>									
科 目 名	授業形態	配当 年次	単 位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号 ◎達成のために特に重要 ○達成のために重要					
						①	②	③	④	⑤	⑥
多文化共生ゼミナール1	演習	2	2	グローバリゼーションは様々な国や地域に多様な文化をもたらしている。そしてそれらの文化は他者の文化と共生しながら変容している。この演習では、どのような国や地域で、どのような文化の共存があるのかをアクティブラーニングで学ぶ。	(1)グローバリゼーションの歴史的側面を知る。 (2)様々な国や地域における他者の文化の移植について知る。 (3)文化が異なる他者と人々はどのように関係・共生しているのか考えることができる。		○	○	◎		
多文化共生ゼミナール2	演習	2	2	グローバリゼーションがもたらす様々な国や地域に多様な文化は、他者の文化へのからの抵抗をも引き起こしながら変容している。この演習では、どのような国や地域で、どのような諸文化間の軋轢があるのかをアクティブラーニングで学ぶ。	(1)グローバリゼーションの歴史的側面を知る。 (2)様々な国や地域における他者の文化の抵抗のあり方について知る。 (3)文化が異なる他者と人々はどのように関係・対抗しているのか考えることができる。		○	○	◎		
国際事情ゼミナール1	演習	2	2	グローバリゼーションを背景に人、モノ、資本、価値などが国を越境し、世界中で異文化間の衝突や文化の変容が起こっている。この授業では、グローバリゼーションが地域社会に与えている影響について学ぶ。	(1)グローバリゼーションが世界中で引き起こしている問題について知る。 (2)グローバリゼーションが地域社会に与える影響について説明できるようになる。 (3)グローバリゼーションに関して、自分の考えを持てるようになる。		○	○	◎		
国際事情ゼミナール2	演習	2	2	グローバリゼーションがすすむ現代社会のなかで、地域社会に暮らす人々はどのように日々の生活を営んでいるのだろうか。この授業では、地域社会に暮らす人々の視点にたちグローバリゼーションをとらえなおすことを学ぶ。	(1)現代社会のなかで加速するグローバリゼーションの実例について知る。 (2)地域住民の視点に立ち、グローバリゼーションを分析する視点を身につける。 (3)グローバリゼーションに関して、自分の考え方を発表できるようになる。		○	○	◎		
歴史文化ゼミナール1	演習	2	2	2年生向けの演習科目である点を踏まえ、この授業ではヨーロッパの歴史や文化に関する知識と理解を着実なものにするため、基本的な文献を読んで、レジュメ(要約)を作成して発表し、議論する形式で授業を進める。テーマの候補としては、多文化共生、歴史認識、食文化、スポーツ、環境などを考えている。	(1)3・4年生での学びに向けて、質の高いレジュメ(要約)を作成することができる。 (2)作成したレジュメをもとに、プレゼンテーションをする技術・能力を高めることができる。 (3)ヨーロッパの歴史や文化に対して理解と関心を深めることができる。		○	○	◎		
歴史文化ゼミナール2	演習	2	2	「歴史文化ゼミナール1」で身につけた知識や技能を土台としながら、引き続き、ヨーロッパの歴史や文化に関する文献を読んで、レジュメ(要約)を作成して発表し、議論する形式で授業を進める。テーマについては教員も候補を用意するが、基本的には受講生が関心を抱いているテーマを尊重することで主体的な学びを後押ししたい。	(1)ヨーロッパの歴史や文化に関して自らテーマを見つけ、文献(資料)を探し出すことができる。 (2)3・4年生での学びに向けて、質の高いレジュメ(要約)を作成することができる。 (3)作成したレジュメをもとに、プレゼンテーションの技能をさらに高めることができる。		○	○	◎		
社会調査法入門	講義	1	2	この授業では、社会科学的な視点から社会調査の歴史と意義について確認したうえで、調査の入門段階としてデータ収集方法や社会調査の諸類型についての基本事項を学習する。	(1)社会調査の目的・意義を確認し、社会調査の歴史が理解できる。 (2)社会調査に必要な資料分析の仕方を知得できる。	◎	○			○	
社会調査法1	講義	1	2	社会調査を行うためには、正しい調査設計と実施方法が不可欠である。この授業では、社会調査によって資料やデータを収集し、分析する形にまで整理していく具体的な方法を解説する。	1)行おうとしている調査の目的を明確に意識したうえでそれに適した調査設計との結びつきを説明できる。 2)目的に応じて設計された調査を適切に実施するための方法を選択しその理由を説明できる。	◎	○			○	
社会調査法2	講義	1	2	この授業では、一次資料のデータ分析技術を学ぶ。内容としては、単純集計やクロス集計などの記述統計データならびに質的データの読み方をとりあげ、実証分析について理解を深めることを目的とする。	(1)社会調査に必要な量的・質的データ分析のスキルを身につける。 (2)官庁統計や簡単な調査報告が理解できるようになる。	◎	○			○	
社会調査法実践A	講義	2	2	この授業では、社会調査に関わる基礎事項を活用し、自ら調査を実施可能となる。調査報告書の執筆を通じて、調査データを自力で解析できる。	(1)これまでに履修してきた社会調査の知識を活用し、自ら調査が実施可能となる。 (2)調査報告書の執筆を通じて、調査データを自力で解析できる。	◎	○			○	
社会調査法実践B	講義	2	2	この授業は、調査実習を行うことを目的として、春学期に設定した調査テーマ並びに計画にそって、調査対象者への深層面接調査を実施し、その結果を分析し、報告書の執筆にいたるまでの一連の社会調査のプロセスを体験する。	(1)社会調査の一連の過程を体験することで、調査を実施できるスキルを身につける。 (2)自らの調査項目をもって調査対象者に連絡し、深層面接調査を実施することができる。 (3)調査のメンバーと調査スケジュールを調整しながら進めることができる。	◎	○			○	
質的調査研究	講義	2	2	フィールドワークの方法論について、基礎知識を学び、宿題の提出や最終レポートの作成を通して実践的に理解する。インタビュー調査について重点的に学ぶ。	(1)文化人類学や社会学の質的調査で用いられるフィールドワークの方法論について理解する。 (2)問題の設定から、調査(フィールドワーク)の方法、レポートの作成に至るプロセスについて学び、卒業論文執筆に向けての基礎的な能力を習得する。	◎	○			○	
宗教学	講義	1	2	「宗教」とは何か、それは時代や地域でどのように異なっているのか、それらの「宗教」に基づいて人々はどうに生き、価値を見出しているのか。この授業は、国の内外で見られる宗教的な事象について学びながら、学問として「宗教」を理解する態度を身につける。	(1)宗教学の基礎的な概念を現実的な問題に関連付けて理解することができる。 (2)これにより宗教学的な思考法を身につける。 (3)身につけた思考法をグローバルなテーマを理解するために応用することができる。	○	◎	○			

ディプロマ・ポリシー	次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。 ①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術) ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識) ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考) ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲) ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度) ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国の内外で「他者への献身」ができる(行動)					
------------	--	--	--	--	--	--

科 目 名	授業形態	配当年次	単位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号 ◎達成のために特に重要 ○達成のために重要					
						①	②	③	④	⑤	⑥
社会学概論	講義	1	2	「社会」はどのように生まれ変容しているのか、時代や地域でどのような違いがみられるのか、それらの「社会」において人々はどういうに生き、価値を見出しているのか。この授業は、グローバルなテーマを研究する3人の教員がそれぞれの専門的な知見に基づいて講義することで、受講生は国際的な視点で「社会」を理解する態度を身につける。	(1)社会学の基礎的な概念を現実的な問題に関連付けて理解することができる。 (2)これにより社会的な思考法を身につける。 (3)身につけた思考法をグローバルなテーマを理解するために応用することができる。	○	◎	○			
多文化共生学	講義	2	2	ベルリンの壁崩壊(1989年)を契機としてグローバル化と多文化化が一気に進展し、日本に暮らす外国人も多様化しました。しかし、この多文化化・多様化は、必ずしも多文化共生社会の到来を意味してはなりません。ヘイトクライム問題、在留外国人に対する不当な差別、先住民族に対する理解不足などの例から、「共生」という状況には遠い現実のなかで私たちは日々を過ごしています。この講義では、日本に暮らす様々なマイノリティの歴史と現状について概説するとともに、私たちの日本を多文化共生社会に近づけていくためにどのような視点が有効・必要なのかを考えていきます。	(1)日本に暮らすさまざまなマイノリティの文化や歴史を説明することができる。 (2)現代の日本社会で、異なる文化や民族・国籍をもつ人々との共生が必ずしもうまくいっていない理由を説明することができる。 (3)未来の社会を作っていく一員として、多文化共生社会の実現に向けて有効な取り組みや行動を具体的に提案することができるようになる。	○	◎	○	○		
国際法	講義	2・3・4	2	国際法は、伝統的に主権国家の関係を規律する法として理解されてきた。しかし、グローバル化の進展にもない、国際機構やNGO、個人といった国家以外の主体にも関わるものへと変化してきている。したがって、現代を生きるわれわれにとって、国際法を理解することは、世界のありようを理解しより豊かな社会生活を送るために不可欠なことのできないものと言える。この授業では、こうした状況をふまえてわれわれの身の回りに起こる日々の出来事にも目を配りつつ、国際社会の重要課題を法的な視点から捉え考察することを目的とする。	(1)現代国際法の特徴について知り、説明できる。 (2)国際社会に生起する諸現象を法的な観点から体系的に観察・記述・評価できる。 (3)国際的な裁判所の判例学習を通じてリーガル・マインドを身につける。	○	◎				
国際政治学	講義	2・3・4	2	本講義では、現代の国際政治を考えるための基本的視座・視点、および基礎的な概念を解説する。国際関係の歴史的展開を紹介したうえで、いくつかの具体的なテーマをとりあげて、現在の国際政治のあり方と課題について講義する。	(1)学生が国際政治に関する基本的な知識を身につけることができる。 (2)学生が国際政治の歴史的な展開を理解することができる。 (3)学生が国際政治の現状を観察・分析することができる。 (4)学生が国際政治の動きを、自分の言葉で論理的に説明できるようになる。	○	◎	○			
国際関係論	講義	2・3・4	2	本授業では、旧ソ連の諸国の国際関係について学ぶ。現在起きている国際関係の背景にある旧ソ連の社会や人々をつないでいた共通の文化などについて把握する。その知見が複雑な現代の旧ソ連地域の国際関係を理解する鍵になる。	(1)旧ソ連の社会的なつながりを知る。 (2)旧ソ連の文化的なつながりを知る。 (3)現在の旧ソ連地域の国際関係を学ぶ。	○	◎	○			
国際経済史	講義	2・3・4	2	21世紀の経済は地球規模での相互依存が深化する同時に、地域内や社会内の格差も拡大している。本授業は、ローカル経済とグローバル経済の相互関係、地球規模で流通する資源や商品の変遷、通貨と金融、エネルギーとライフスタイルなどの問題を歴史的に学ぶことから、現代世界の課題を見つめ直していく。	(1)世界史上の経済に関する重要事象について自分の言葉で語るができる。 (2)自分の衣食住やアルバイト上の経験など身近な事例から、国際経済を説明できる。 (3)SDGsの経済的取り組みについて考え、語り、行動できるようになる。	○	◎	○			
経済学概論	講義	2・3・4	2	世界経済の歴史を学び、世界経済がどの国や地域を主人公とし、どのような点で成長し衰退したか説明できるようにするとともに、世界各地の経済発展がキャッチアップ型とリープフロッグ型のせめぎ合いで進行してきたことを理解し、説明できるようになることを目指す。この授業では歴史を学ぶ前提として地理学の面白さを伝え、そのあと、古代中国のさまざまな発明からイギリス産業革命までをとりあげ、世界経済の発展をたどり理解する。	(1)経済学の基礎的な概念を理解したうえで、日々の経済生活の成り立ちを体系的に説明することができる。 (2)歴史的な文脈や論点を踏まえつつ、経済学における古典的文献を読みこなすことができる。 (3)経済学的な思考様式を援用しながら、資本主義に関わる自身のヴィジョンを説得的に表現することができる。	○	◎	○			
環境政治論	講義	2・3・4	2	欧米由来の自然保護思想をもとに行われていた環境政策は、いかに住民に影響をあたえているのだろうか。この授業では、自然と深いかわりを維持してきた住民の視点にたち、環境持続的であり文化的に適切な環境政策のあり方について考える。	(1)環境政策の成り立ちについて知る。 (2)環境政策が住民に与える影響について説明できるようになる。 (3)環境政策において重要な視点をもてるようになる。	○	◎	○			
地域統合論	講義	2・3・4	2	21世紀に入り、自由貿易協定(FTA)の締結を通して、投資や貿易等の経済的な関係を制度的に統合しようとする地域経済連携の動きが世界各地で活発化している。この授業では、アジア太平洋地域やヨーロッパでの地域統合のねらいと歴史を概説する。とりわけ統合が経済分野にとどまらず、政治分野においても深い統合を進めている欧州連合(EU)の例を多面的にみていくことで、地域統合の重要性とリスクについて理解を深めてもらいたい。	(1)世界各地の地域統合のあり方とその違いを理解することができるようになる。 (2)さまざまな地域統合の歴史について説明することができるようになる。 (3)地域統合の長所だけでなく、リスクについても議論することができる。	○	◎	○			
比較宗教学	講義	2・3・4	2	本授業は、世界各地の信仰を比較して共通点や相違点を考察していく。仏教、ヒンズー教、イスラム教、キリスト教などのメジャー宗教だけでなく、航海信仰や山岳信仰など多様な民間信仰もとりあげ、形而上学的世界ではなく、祈りの場や庶民の希求など基層の世界を重視しながら授業をすすめていく。	(1)世界の諸宗教に関する基本事項について自分の言葉で語るができる。 (2)教義や経典などで概念的に比較するだけでなく、多様な祈りの現場から類似や相違を捉えることができる。 (3)宗教が要因となる分断や紛争について考え、語り、行動できるようになる。	○	◎	○			

ディプロマ・ポリシー	<p>次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。</p> <p>①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術) ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識) ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考) ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲) ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度) ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国内外で「他者への献身」ができる(行動)</p>										
科 目 名	授業形態	配当年次	単位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号 ◎達成のために特に重要 ○達成のために重要					
						①	②	③	④	⑤	⑥
多文化体験活動1	実習	1・2・3・4	1	国の内外の多文化に生で触れる貴重な機会として、学生が自主的に体験活動の内容を企画し、担当教員に相談の上実践する。	(1)他者の様々な文化に触れ、体験することができる。 (2)活動を企画し、報告書としてまとめる能力を養うことができる。		○	○	○	◎	
多文化体験活動2	実習	1・2・3・4	1	国の内外の多文化に生で触れる貴重な機会として、学生が自主的に体験活動の内容を企画し、担当教員に相談の上実践する。	(1)他者の様々な文化に触れ、体験することができる。 (2)活動を企画し、報告書としてまとめる能力を養うことができる。		○	○	○	◎	
卒業論文		4	4	学部・学科教育の集大成であり、4年間学んできた成果を表現する場である。関心のある対象・テーマに関して、先行研究を踏まえながら、独自の意見を形成し、説得的かつ論理的な論文を作成する能力を養成する。	(1)先行研究に関する文献調査ができる。 (2)テーマに関するフィールド・アンケート調査ができる。 (3)独自の意見を形成できる。 (4)意見を論文のルールにしたがって表現できる。				○	○	◎

ディプロマ・ポリシー	次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。 ①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術) ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識) ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考) ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲) ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度) ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国の内外で「他者への献身」ができる(行動)					
------------	--	--	--	--	--	--

科目名	授業形態	配当年次	単位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号 ◎達成のために特に重要 ○達成のために重要					
						①	②	③	④	⑤	⑥
グローバル文化論	講義	2・3・4	2	「多様性」は未来のことではない。「多様性」は存在している。他人を差別してはいけない、暴力は問題解決の手段ではない、ということを知ることである。しかし、差別も戦争もなくならない、この授業では、どのような場合に人間や文化の多様性が無視(不可視化)されてきたのか、その歴史を学ぶことで未来の多様性共存の態度を養う。	(1)差別と抑圧の世界史を知る。 (2)それを正当化する「野蛮」の言説の存在を知る。 (3)他者と共存できる思考・態度を身につける。	○	○	◎			
アジア地域文化論	講義	2・3・4	2	この授業では、韓国社会への知識を高めるために、首都ソウル市と地方都市の地域文化をとりあげ、社会的視点から、国家政策ならびに地方自治体が地域文化に与える影響を学習する。	(1)韓国の首都と地方都市についての歴史と現状を説明できる。 (2)韓国社会の多様な地域文化への知識を深め、日本社会と比較する能力を高める。	○	○	◎			
オセアニア地域文化論	講義	2・3・4	2	西洋人と接触する以前のハワイの伝統文化について学び、接触後の文化変容やハワイ併合に至る歴史を理解し、現在の多民族社会ハワイにおけるハワイ人について学ぶ。	(1)ハワイとハワイ人の歴史と文化について、基礎的な知識を身につける。 (2)異なる文化が出会うハワイを知ることで、文化とは何か、異文化接触により何が起るのかについて考える力を養う。	○	○	◎			
ヨーロッパ地域文化論	講義	2・3・4	2	40か国以上の国々がひしめくヨーロッパには、様々な言語、宗教、生活習慣、価値観が見られる。この授業ではそれらの中から、おもにドイツ語圏およびフランス語圏で守られてきた宗教行事・お祭り(カーニバル、復活祭、クリスマス)、食文化、世界文化遺産を紹介する。また、世界各地から受け入れてきた移民や難民たちがヨーロッパで出身地域の文化と定住先地域の文化を融合(ミックス)させているのを取り上げる。	(1)ヨーロッパの言語、宗教、生活習慣、価値観の多様性について具体的に説明できる。 (2)移民・難民が大切にしている出身地域の文化や移住先の文化との融合について説明できる。 (3)地域統合を進めるEUのモットー:「多様性の中の統一」の功罪について議論できる。	○	○	◎			
スラヴ・ユーラシア地域文化論	講義	2・3・4	2	本授業で使用するスラブ・ユーラシア地域とは、旧ソ連の国々や地域、さらには旧東欧諸国のことを指している。この地域はヨーロッパ地域のみならず、アジア地域、カフカース地域、中央アジア地域を含んでいる。したがって文化も非常に多様であり、相互に影響を与えながら豊かな文化を育んできた。しかし、ソ連解体前後から国の体制はもちろん文化面においても大きな変化を受けている。実際にどのような変化が文化面で見られるのかについて学ぶ。	(1)この地域の文化の多様性について知る。 (2)この地域の文化の多様性とその変化について考える。 (3)ソ連解体後のこの地域の文化の状況について知る。	○	○	◎			
アフリカ地域文化論	講義	2・3・4	2	アフリカ大陸に対して、大自然というイメージを持つ人は多いが、そこに暮らす人々について知る人は少ない。この授業では、豊富な自然を活用しながら文化を成り立たせている人々について学ぶ。	(1)アフリカの自然の多様性について学ぶ。 (2)アフリカの文化の多様性について学ぶ。 (3)ステレオタイプのアフリカ観を乗り越える。	○	○	◎			
アメリカス地域文化論	講義	2・3・4	2	アメリカス世界の文化の基層にはメソアメリカ文明、アンデス文明に代表される古代文明が存在する。この授業では、近年飛躍的に研究が進化した古代メソアメリカ文明に焦点をあて、最新の研究成果を活用しながら、その概要を学習する。	(1)マヤ文明の概要を説明できる。 (2)マヤ文明の魅力を語ることができる。	○	○	◎			
世界の歴史と社会	講義	3・4	2	本授業は、気候変動や環境変化、自然災害やパンデミック、人口の増減や移動、国境や海洋をめぐる軋轢、植民地支配や先住民問題、地域紛争と世界大戦など、国や地域の枠組みではとらえきれない歴史事象を、グローバルな視点で学んでいく。	(1)世界の歴史と社会に関する重要な事象について自分の言葉で語るができる。 (2)国や地域をこえた地球市民として視野と発想力・思考力を身につける。 (3)21世紀の人類の課題解決のために考え、語り、行動できるようになる。		○	◎	○		
アジアの歴史と社会	講義	3・4	2	前近代中国では国家機構が唯一最大の権威ある組織であり、軍事・司法・民生から文化に至るまで国家が直接統制していた。強力な国家機構による統制は、中国が周囲の国々に対して圧倒的優位に立つ基盤をなしたが、内外の状況が悪化すると急速に力を失い秩序を維持できなくなるという弱点があった。この授業では、明・清時代の中国における国家と社会の関係について学び、アジアの伝統的社会的あり方をその成り立ちに遡って理解できるようにする。	(1)中国の伝統的な国家と社会の関係について知る。 (2)伝統的社會が形成される歴史的経緯を理解する。 (3)社会の特性を歴史的経緯に基づいて考察する態度を身につける。		○	◎	○		
オセアニアの歴史と社会	講義	3・4	2	オセアニア社会の歴史の変遷をたどりつつ、今日的なテーマやトピックについても注意を払いながら、ビデオなどの教材も利用してオセアニアの歴史を概観する。オセアニアの中でもポリネシア、メラネシア、ミクロネシアの島嶼部を中心に学ぶ。	(1)オセアニアの歴史と文化について、主に文化人類学の観点より理解する。 (2)太平洋の島々の伝統的な社会や文化について知り、異なる文化が出会った時に何が起るのかを理解し、文化についての理解を深める。		○	◎	○		
ヨーロッパの歴史と社会	講義	3・4	2	この講義では、「国家間・イデオロギー間の対立と和解」という観点から、20世紀以降のヨーロッパ現代史の節目に起きた出来事を取り上げます。特に重要な節目として挙げられるのは、ヒトラーが政権を掌握した1933年、第二次世界大戦が終結した1945年、伝統的価値観が根底から揺らいだ1968年、そして冷戦が終結した1989年、ロシアによるウクライナ侵攻が始まった2022年になるでしょう。	(1)ナチス・ドイツの人種政策が、現代の日本社会とも関わる問題であることを説明することができる。 (2)東西冷戦の象徴と言われたベルリンの壁について、建設された目的や背景、崩壊に至った経緯を説明することができる。 (3)対立・憎悪から和解・協力への道を選択したヨーロッパの歩みをヒントに、アジアの中で日本が果たすべき役割について自分なりの見解をもつことができるようになる。		○	◎	○		

ディプロマ・ポリシー	次のような知識や能力を備えた学生に学士(国際文化学)の学位を授与します。 ①異文化理解に必要な情報収集力と言語能力を身につけている(技術) ②世界や地域の多様な文化について、学際的な見地から理解する見識を身につけている(知識) ③世界や地域の諸問題に関心をもち、情報収集と分析を通して公共に資する課題を設定することができる(思考) ④言語と知識を駆使して異文化交流に積極的に取り組む主体性を身につけている(意欲) ⑤言語・文化を異にする他者と共に生き、多様性を尊重することができる(態度) ⑥国際交流、海外伝道、国際観光、国際スポーツ指導、国際ビジネス、地方創生などにおいて国内外で「他者への献身」ができる(行動)					
------------	---	--	--	--	--	--

科目名	授業形態	配当年次	単位	授業の主題	授業の到達目標	ディプロマ・ポリシーの番号					
						①	②	③	④	⑤	⑥
スラヴ・ユーラシアの歴史と社会	講義	3・4	2	本授業で使用するスラヴ・ユーラシアとは、旧ソ連の国々や地域、さらには旧東欧諸国のことを指している。授業では、1985年のソ連のベレストロイカ開始から現在までの歴史的な側面と社会の変遷について多角的に学ぶ。	(1)ベレストロイカから現在までのこの地域の歴史について知る。 (2)ベレストロイカから現在までのこの地域の社会の変化について知る。 (3)スラヴ・ユーラシアの現状と今後について考える。		○	◎	○		
アフリカの歴史と社会	講義	3・4	2	紛争、病気、環境破壊、自然保護による住民の生活・文化の圧迫など現代アフリカが抱える問題について学ぶ。この授業では、これらの問題を歴史的な背景から掘り下げ、問題解決に重要な視点について考える。	(1)現代のアフリカが抱えているさまざまな問題について知る。 (2)アフリカの抱える問題を歴史的観点から説明できるようになる。 (3)問題解決に重要な視点を身につける。		○	◎	○		
アメリカスの歴史と社会	講義	3・4	2	地球の陸地面積の約7分の1を占め、地球人口の約1割を占めるラテンアメリカの歴史を学ぶ。アメリカス世界の非人道的な欧米によるコロニアルおよびポストコロニアル支配の実態を学習し、歴史世界に批判精神をもてるようにする。	(1)アメリカス地域の歴史概略を把握する。 (2)先住民に対する歴史的な支配と抑圧の実態を知る。 (3)歴史的な事件を社会構造的に捉える態度を身につける。		○	◎	○		